

よきおとずれ

カトリック釧路教会だより
第13号 2018年12月24日発行



クリスマスのおくりもの

ヘルマン 渡辺 義行 神父

久しぶりに、友人たちと食事を共にする機会がありました。そのなかに赤ちゃんを連れて来た友人がいました。その赤ちゃんは大きな籠の中ですやすやと寝ていました。私たちは、話しに夢中になっていてつい赤ちゃんを置き去りにしていたのです。

すると、出入りする人たちが次々に赤ちゃんを眺めて微笑んだり、話しかけたりしてはいませんか。その誰もが、優しい顔や和やかな顔になっているのに気付かされたのです。それは、忘れ難い思い出になっています。

ベトレヘムで最初に赤ちゃんイエスに出会ったのは、もちろんマリアさまでありヨセフさまなのでしたが、その次は羊飼いたちでした。この人たちは、みな飼い葉桶に眠る赤ちゃんをじーっと見つめていたに違いありません。

赤ちゃんって、あどけなく可愛くて、無垢ですが、また、無防備で、誰かに保護してもらわなければ生きてはいけませんよね。そ

んな赤ちゃんから私たちは、みずみずしいのちの輝きに触れ、かけがえのない存在を教えられるでしょう。また、赤ちゃんのやさしさ、微笑みなどによって癒されもするのです。

イエスさまは、動物たちが生活する場所でお生まれになりました。それは、「キリストが神の身分でありながら、神としてのあり方に固執しようとはせず、かえって自分をむなしくして、僕の身分となり、人間と同じようになって」(フィリピ2:6)、私たちを救われるためでした。

ある日、だいすけ君(三歳)が、お母さんに向かってこう言ったそうです。あのねママ／ボクどうして生まれてきたのか知っている？／ボクね ママにあいたくて／うまれてきたんだよ

イエスさまは、私たちに会いたくてお生まれになったのだと言えますね。クリスマスのおくりもの、それはイエスさまなのです。クリスマス おめでとうございます！

ラザロ神父様インタビュー②

思い出すまに

1956年神学校を卒業した後、司祭に叙階されました。カリシモ神父様と一緒にしました。それから南イタリアの小教区で2年、ベネチアに戻って、市立病院付きの神父として2年間奉仕しました。そのころアジアでの宣教の呼びかけがあり、私は本当はチベットに行きたかったのですが、宣教師の受け入れを拒否されていたので、日本を希望しました。準備のためイギリスで1年間英語を勉強し、イタリアに戻って1963年8月末にジェノバの都から船に乗り、スエズ運河、パキスタン、インドを回って横浜の港に着いたのは10月12日でした。東京で2年間、日本語の勉強をして北海道に来ました。

日本語は難しく、ある夜、全身に日本語が書かれているロボットに襲われる夢を見たほどです。苦勞している私を見て、ある信者が「自由に話した方がわかりやすい」と言ってくれたので、このアドバイスに救われました。それでもお説教が何とか通じるまで5年かかりました。そんな私の活動を支えてくれたのはマリアさまへの信仰です。毎日必ずロザリオを唱えました。運転しながらもバスに乗りながらもです。ロザリオを唱えることは、マリアさまと共にいることです。マリアさまに絶え間なく祈りを続けること、それは大きな力となり、必ず、恵みが与えられます。ある日突然、太陽が現れるように、向こうから光が降りて

きます。それは霊的な恵みです。謙遜な心を持つこと、五感を節制すること、我慢すること、赦すこと、これらは恵みによって与えられます。

私達の人生には何度も試練が来ます。「神さま、何故ですか？」と思う時があるでしょう。でもこの試練がなければ、神の愛がわからない。神にはその人の上に必ず計画があります。試練を乗り越えると神の計画がわかってきます。あきらめずに努力しましょう。必ず光がやってきます。

マリアさまはご自分の息子が十字架にかけられました。これは神秘です。信仰の神秘はすごい。深い淵のようです。私達はその神秘に入らなければなりません。その神秘に入ることは大きな恵みです。

“マリアさま、あなたのそばにいらしてください。十字架のもとにいるあなたのそばに。私もあなたとイエスさまの苦しみをわかちあいたいのです。”

— 続く —

(文責 堀内 優子)



ミサで好きなことと、びっくりしたこと

ポルチェ・ジョズエ

僕の名前はポルチェ・ジョズエです。今年の7月にフランスから鶴居村に引っこしてきました。この時から毎日曜日に釧路カトリック教会のミサにかよっています。今年の6月に釧路教会で初聖体を受けました。そのときからキリストの聖体をやっとなさんと食べられておいしいなど毎回感じ



ています。ミサの中では、キリストの聖体を食べるほか、一番好きなことは歌です。その中で「グロリア」の歌と「神の子羊」が一番好きです。

釧路のミサに初めて来たときにいろいろびっくりしたことがありました。たとえば、教会に入る前にくつをぬぐことはこの一つです。そして、キリストの聖体を食べる時に誰もひざまずかない。たぶん、日本ではキリストの聖体を手で受けて食べるからです。

もう一つおどろいたことはミサのあとで、みなさんと一緒に食事をする事です。フランスではミサのあとで、皆さん家に帰って家族や友達と一緒に食べます。

毎日曜日のミサに、教会のみなさんは僕と僕の家族にいつもやさしいし、いつも僕たちのために祈ってくれてありがとう。僕たちもみなさんのためにもおいのりしています。

(鶴居小学校 3年生)



降誕祭を迎えて

スコラスチカ 小林太美枝

商売をしている私たちが、夫婦そろって洗礼に授かって10年余り。受洗の翌年のことだったと思いますが、とある土曜日、教会を訪れると、光明社が翌日の売店の準備をしていました。「小林さん、これいいんじゃない」と森さんが声をかけてくれました。指をさした先を見てみるとイエス様誕生の馬小屋のセットが…。実は洗礼を授かった年の12月

たまたま、ルカ神父様が私たちの店のウィンドウを覗いてくれて、当時飾ってあった小さなイエス様を抱えているヨゼフ様を見て「マリア様と馬小屋がないね」と言われて是非飾りたいと思い、探しているところでした。そんな時に光明社が教会にもってきて展示したのです。大きさもちょうどよく、ウィンドウに飾っても見栄えがよくその年の12月からは畳4畳ほどのウィンドウいっぱいにはマリア様、ヨゼフ様、天使、3人の博士、羊飼いで、羊の数は年々増え、今では10頭に…。

イタリアでは12月24日に飼い葉桶にイエス様を寝かせると神



父様にお聞きしていましたので、我が家でも12月24日になってから馬小屋の中の飼い葉桶にイエス様を寝かせています。

以前はクリスマスツリーとサンタクロースを飾っていたウィンドウが今では馬小屋に変わり、道行く人がじっとのぞき込んでいる姿が度々見られます。



クリスマスに寄せて

アグネス 遠藤みゆき

クリスマスが近づいてくると、子どもの頃に出会った「ママとふたりのクリスマス」という歌を50代半ばになった今でも思い出す私があります。

小学校1年生の頃に買ってもらった雑誌の

付録だったと記憶しています。赤くて薄いソノシートというレコードのようなもので、雑誌には慎ましやかな幸せが伝わってくる挿し絵が載っていました。

♪ちいさな かわいい ろうそくで
ママと ふたりの クリスマス
まどから みている ほし ひとつ
それでも たのしい クリスマス

♪ちいさな オルガン ならしては
ママと ふたりの クリスマス
かべには ゆれてる かげ ふたつ
それでも たのしい クリスマス

サンタクロースを信じることもなく、プレゼント交換やゲームが苦手な私にとって、きらびやかなクリスマスは何かが違うと感じていました。そのような少女だった私なので、静かで温かなこの歌の歌詞と挿し絵が大好きになり、何度も何度も繰り返し聞いていました。恵まれた暮らしではないけれど『本当の幸せ』のよ



うなものを感じさせてくれた歌でした。

クリスマスの大切な思い出として、子どもたちの聖劇を紹介いたします。我が家の3人の子どもの達は教会学校で大変お世話になりました。クリスマスの頃になるとシスターや先生方が書かれた台本による聖劇を練習して披露することが恒例の行事でした。マリア様、ヨゼフ様、天使、博士、羊飼いや成長とともにいろいろな役を演じる子ども達の姿がありました。衣装を着せていただき、ローソクの光の中でクリスマスの讃美歌を歌う子どもたちの姿は、感謝と幸せに包まれた思い出です。



編集後記

主のご降誕おめでとうございます。

12月2日の降誕節第1主日からスタートしたC年では、ルカによる福音書がよく朗読されます。11月に観た映画「パウロ 愛と赦しの物語」では、投獄されたパウロがルカを通して、宣教活動を行った姿が描かれていました。C年の今年にはルカの福音書を読みながらパウロの殉教を思い巡らし、祈っていく1年としたいと思います。(M.I)

カトリック釧路教会 〒085-0018 釧路市黒金町12丁目10

TEL 0154-22-5823 FAX 0154-22-5832

教会だより 編集：広報委員会